

# 住民同士が助けあう自主防災組織 ～災害弱者を地域ぐるみで守る～

札幌市南区澄川地区連合会 会長 大石 昇司

今年3月に発生した能登半島地震に続き、7月に起こった最大震度6強を観測した新潟県中越沖地震。被害が高齢者に集中し、災害弱者への支援のあり方が改めて浮き彫りになった。災害時には住民同士が支えあう仕組み、自主防災力が問われる。札幌市南区の澄川地区は、阪神淡路の震災を教訓に地区単位規模の自主防災組織を9年前に編成し、地域防災の先進地区として注目されている。地域の防災力を維持していくためにどんな取り組みや工夫がなされているのだろう。「楽しく続けることが必要」と語る大石昇司連合会会長にお話を伺った。

## 町内会の枠を超えた対策の 必要性を痛感

「街が燃え続けるあの状況は、人ごとではない」

大石昇司連合会会長は、阪神淡路大震災の被災状況伝えるニュース映像を見て、「自分の暮らす澄川でも同じことが起こる可能性がある」と感じた。

札幌市の中心街から6km圏にある澄川地区は地下鉄2駅を有する利便性の高い住宅地で、市街地の人口密度は1万4千人と東京の区部並の密集状況だ。さらに過去の宅地造成の影響で道幅が狭く複雑な道路が入り組み、崖の上下に家が立て込むなど、災害に弱い条件が揃っている。加えて高齢者の増加や介護保険法の施行に伴う在宅介護の人々、それら災害弱者の救出活動も課題になってくる。

「阪神淡路の後、現地調査に行きました。淡路島の北淡町では地震発生から20分で災害対策本部を立ち上げて、その日の5時くらいには行方不明者ゼロを確認し、町内全域の救助活動を終了している。行政からの指示や要請を待つてはられません。結局、近所の人たちの結束力



で助け出しているんですね。澄川でもまず、災害に弱い人たちを助け出すシステムをつくろうと考えました。同じような災害が起こった場合、町内会だけの組織では弱い。そこで、澄川に13ある町内会全てに自主防災組織を結成し、同時に地区連合会の常設の防災本部を設置したのです」

## ご近所情報と民生委員情報で 避難を支援。医師や消防・自衛隊OBまで、 層の厚い自衛組織

澄川地区連合会の組織は同時多発災害を想定して、連合会を頂点とするピラミッド型。地区内に13ある単位町内会（600～1200世帯）の自主防災組織が中隊、次の大隊は地区内にある3つの小学校区ごとに所属している各4から5の町内会で、隣接町内会が相互に協力しあう単位になっている。最小単位は地域のゴミステーションを共同で利用している10世帯程度のグループだ。

「近年、独り暮らしの高齢者や在宅介護を受けている人が増えてきていますが、個人情報保護の壁もあり管理することは困難です。北淡町の例からいっても、避難に手助けが必要な方たちを救出するために役立つのがご近所情報ですから、ゴミステーションを核とした考えは、確かな方法。もう一つは民生委員の情報です。澄川では災害発生時に限って民生委員から情報の提供を受け迅速に対応できるような体制も整えています。なお、不測の事態に備えて複数の委員が情報を共有してもらっています」

緊急時には救出救護隊を編成しますが、そのメンバー

として警察・自衛隊・消防OBや日赤奉仕団など組織活動にたけたチームのほか、医師や看護師、重機運転手、土木技術者、無線技師などが定期的に名簿登録され、それぞれの技能を災害時に役立てる体制を整えているのは同地区の特色であり、強みでもある。

防災資機材の充実ぶりにも目を見張るものがある。阪神淡路の時には情報網が寸断され、ダンプカーに搭載していた移動無線機が有効だったことから、防災用無線機を18台装備。親機を防災本部に、残り17台を各町内会幹部宅に設置し、月1回の無線操作訓練を欠かさない。最初に行った総合防災訓練では再現倒壊家屋から人に見たてた人形を素手で救出する訓練を試みた。

「ノコギリなどの機材だけで本当に助けられるのか、と議論が起きて、チェーンソーやエンジンカッター、などの独自の機材も揃えました」他にも可搬式放水ポンプ、投光機、除細動器など充実の装備だ。

さらに、住民の避難場所となる3つの小学校敷地内に防災資材倉庫を設置して救出用機材を格納。災害対応時の効率的な体制づくりに努めている。

## すべての人に役割がある

7月下旬に行われた総合防災訓練は今年で10回目。600名以上の住民が参加し、地元中学生も毎年150人前後が自主参加するほど地区全体に浸透している。災害の発生時間によっては成人男性が町に少なくなることを考えて、地元の中学生や主婦も防災活動の一翼を担う戦力と考えた訓練だ。中学生が水のタンクを運び、経験豊富なお年寄りやけが人に付き添い看視する。「すべての人に役割がある」と、大石会長は力を込める。

「この訓練は地元の中学生が参加しやすい、夏休み直前の土曜日に設定しています。また、近年は消防署職員には後方支援に回ってもらい、できるだけ住民が行う実践的な訓練に努めています」

参加した子供たちが大人になり、いずれは地域の担い手に育つことを予想させる地域活動といえるだろう。

## 日頃の地域活動が防災力につながる

災害は、いつどんな形で発生するか分からない。「予測不可能なことに自主防災組織と能力の維持を続けるには工夫が必要で、他の行事と重ね合わせて楽しく継続することが大切」と大石会長。

澄川では、毎年2500人以上が参加する町内会対抗の大運動会や秋まつり、よさこいソーラン等の行事を組織の活性化に役立てている。つまり、イベントを運営するノウハウを普段から備えておけば、いざという時に住民が協力しあって防災活動を実施することができるというわけだ。

「例えば運動会や祭りの会場運営は救護所の運営に通じる。もっと工夫して楽しい運動会にしようとか、今回

は準備の段取りや後片付けが上手いいったね、など、その検証が自主防災のレベルアップにつながる。考え次第で町内会行事が防災活動の訓練になる」

さらに同地区には住民が気軽に地域活動に参加できる窓口として「快援隊」という組織がある。「自分の興味のあることを無理なく」という呼び掛けに対し、現在180名程の中学生以上の登録者が、防犯・防災活動、違法広告の撤去、高齢者宅の除雪の手伝い、イベントの運営などに参加。その中から本格的に活動にのめりこむ人が育ってほしいと期待している。

「安心・安全なまちづくりは小・中学生から大人までをつなぐ循環型にしていかなければならない。その手立てとしていろいろな地域活動がある。澄川の今の活動を10年、20年と停滞することなく工夫して続けることで、より住み良いまちになる、と楽しみに活動しています。住民一人一人が地域に何かを残す。という気持ちを持ってたなら、地域はきっと変わるはず」

自分達の街は自分達が中心となって守ることが自主防災の原点。大石会長の言葉通り、住民の参加意識が防災力を高めていく源なのだろう。



総合防災訓練に参加の地元の中学生

### Profile

#### 大石 昇司（おおししろうじ）

札幌市南区澄川地区連合会 会長

総務省消防庁地域安心安全ステーション伝導師

住民が相互に支えあうような地域社会の実現を目指して、持続可能な安心と安全なまちづくりを推進。1998年に町内会の枠を超えた地域ぐるみの防災活動組織を設立。中学生によるボランティア除雪や様々な分野で活躍するボランティア組織「快援隊」の設立など、人材育成にも力を注いでいる。かつて自分が住んでいた西宮市が阪神淡路の震災で大打撃を受けたことを契機に、住民による自主防災組織の必要性を痛感。太平洋戦争時、戦火の中を近所の子供の手を引いて逃げ延び、感謝された10代の頃の記憶や、集中豪雨で床上浸水した自宅の後片付けで日赤奉仕団の人達に助けられた時の感謝の気持ちが、自主防災組織立ち上げを後押ししたという。1987年副会長、1995年から会長。

#### 札幌市南区澄川地区連合会の主なあゆみ

- 1989年 広域指定暴力団の排除活動開始
- 1998年 札幌市内で初の地区単位規模の自主防災組織設立
- 2004年 防災まちづくり大賞受賞（総務省消防庁主管）  
消防庁提唱の「地域安心安全ステーション整備」  
モデル事業地区指定